

こだま

増田光

HIKARU MASUDA



松本出版

こだま

増田
光

命運のプロジェクト

「LNG 権益の獲得、君に任せたま。このプロジェクトは文字通り社の命運がかかってる」

「お任せください。いつてらっしゃいませ、社長」

東峰商事の営業本部長、芹沢太郎は、長期の海外出張へ向かう社長の車が、通りの流れに紛れて見えなくなるまで見届けた。

LNG 権益とは、海外のガス田から採れる液化天然ガスを、出資の割合に応じて手に入れる権利のことだ。東峰商事は、これに数千億円を投じようとしていた。

会社の近くには、社員行きつけの喫茶店がある。

「それで父さん、話って？」

若手ながら親譲りの頭角を現しつつある芹沢翔平が、少し身構えるように切り出した。

「俺は今回の案件に死力を尽くすつもりだ。これで引退してもいいと思ってる」

「なんだよそれ。まだ父さんを必要としてる人はたくさんいるよ」

「そうかもな。でも翔平も、もう一人前のビジネスマンだ。ただ、少し正義感が強すぎる時があるな」

「それは父さんもだろ。俺が小さいころ、『正しい行いは必ず見られてる』って口癖みたいに言ってたじゃん」

少し沈黙が続いた……。

ブー、ブー。

太郎のスマホが震える。

「もしもし。……わかった。すぐ行く」

「どうしたの、父さん」

「野暮用だ」

太郎は一息おいて続けた。

「いいか翔平。正しい行いは必ず見られてる。だがな、悪い行いも必ず見られてるんだ……。副本部長の案件には首を突っ込むな」

そう言い切ると、太郎はジャケットをつかみ、足早に喫茶店を出ていった。

翔平の頭の中では、父の言葉がなぜかこだまし続けていた。

「もしもし、翔平？」

突然の電話にワンコールで出たのは、翔平の同期にして一番の好敵手、岸辺だ。

「岸辺、調べたいことがある」

その夜、二人は人の消えたフロアで、副本部長が管理する共有フォルダを開こうとした。だが、翔平の権限では開けないフォルダだった。岸辺は少し迷ってから、自分のIDを打ち込んだ。そこに並んでいたのは、LNG案件の資金計画だった。

「俺は見なかったことにするからな」

岸辺は釘を刺すように小声で言ったが、翔平の手は止まらなかった。

画面をスクロールしていくと、ある数字のところで翔平の指が止まった。社内で説明されていた額より、権益の取得費用が百億円も多い。

「……なんだ、これ」

暗躍

一週間後。高級スーツに身を包み、爪を整えている副本部長の大塚が、広い会議室で声を張り上げた。

「岸边エ！ これはなんだ！」

机にフォルダが叩きつけられる。

「君のIDだ。誰に頼まれた？」

岸边の頭には、もうごまかそうという考えは微塵もなかった。あったことを話さない。

「芹沢翔平です。彼に頼まれて、副本部長の管理フォルダを見せました。なんか、彼の父親がどうか……」

大塚は少し考えてから言った。

「そうか。よく正直に言ってくれた。もう下がりなさい」

岸辺が部屋を出た刹那、大塚の顔から鬼の形相は消え、笑みが浮かんでいた。

翔平はその夜も調査を続けていた。百億円の行き先をたどると、ジャカルタの小さなコンサル会社への「調査費用」に行き着いた。念のため、同じ社名で過去の伝票を検索してみる。

「……二十六年前？」

画面に並んだのは、二十六年前の伝票だった。当時の海外案件の損失の中に、この会社への「調査費用」が何度も計上されている。起票者の欄には、どれも同じ名前があった。

「海原慎一……」
かいばら

その名前は三年後の伝票から、ぷつりと消えていた。

「あー、わからん！……てか、腹減ったなあ。帰るか」

時計を見ようとオフィスの奥に目をやると、副本部長室から父が出てくるのが見

えた。

父はこちらに気づき、歩いてくる。

「まだ残ってたのか。早く帰れ」

短くそう言うと、父はいつもよりゆったりとした足取りでオフィスを出ていった。

翔平も帰り支度を始めた、そのときだった。

「ウフフ……アハハハ!! ハハハハーツ!!」

副本部長室から、不気味でどこか無邪気な笑い声が聞こえてきた。高音の混じったその声は、逆鱗のそばを撫でられるような、ねっとりとした不快感を呼び起こす。

翔平は足早にオフィスを出た。

翌日、翔平は連日の調査で疲れた顔のまま出社した。

周りがざわついている。

「本部長も結局そういう感じなのか」

「息子に手伝わせるなんて、エグいことするよなあ」

「よりによって社長がいないタイミングで……」

いくつかを聞き取りながらも聞き流して準備をしていると、岸边がこちらに走ってくるのが見えた。岸边は翔平から目をそらしながら、話し始めた。

「はあ、はあ……お前の父さん、やばい噂立ってるぞ」

「え？」

九時、始業。毎朝の朝礼は、プロジェクトチームごとに会議室で開かれる。

早速、ニヤけ面の大塚が口を開くかと思われたとき、先に話し始めたのは太郎だった。

「少しいかな」

みんなの視線が集まる。

「騒がせてしまい、申し訳ない。私は本プロジェクトの代表を辞任し、大塚君に代

表を任せようと思う。以上だ」

一気に辺りがざわついた。

太郎はそのまま会議室を出ていく。

「ちょっ、父さん……父さん!!」

翔平の呼び止めも聞かず、扉が閉まった。

大塚が半笑いで話し出す。

「フッ、ということだ。みんなの業務に変更はない。今日も張り切って頼むよ」
翔平の耳には、何ひとつ入ってこなかった。

因縁

翌日から、太郎は会社に来なくなった。有給休暇扱いで、電話にも出ない。

「出張って言って出てったわよ」

久しぶりに会った母は、少し老けたように見えた。母も行き先は知らないようだ。

社内の知り合いや岸辺の助けも借りて、翔平は夜遅くまで父を探し続けた。気がつくど、オフィスの近くまで戻ってきていた。

「ここは……」

いつもの喫茶店だ。一縷の望みをかけて、店に入ってみる。

いつもの席に、太郎が一人で座っていた。

「父さん。説明しろ」

太郎は驚きもせず、黙って手で向かいの席を示した。そして、重い口を開いた。

「ジャカルタ支店の海原慎一に会え」

一拍おいて、続ける。

「会社を頼む」

翔平は確信した。父は二十六年前の件に関わっている。そして大塚はそれを利用して、父を嵌めたのだ。

「わかった……。あの、お疲れさまでした」

それが、翔平なりの父への敬意であり、覚悟の表れだった。

翔平はすぐに、車の音で騒がしい夜のオフィス前に岸辺を呼び出した。

「明日、ジャカルタへ行く。たぶん、そこに真相がある」

岸辺は一瞬、都会の空を見上げて深呼吸をした。

「うん、俺も行くよ」

「なんか気をつかつてる？ 父さんは見つかったし、もういいんだ」

翔平はそう言ったが、岸辺の理由は別にあった。大塚に情報を話してしまった負目だった。

翌日、二人はジャカルタへ飛んだ。

支店で用件を伝えると、暗くて蒸し暑い部屋に通された。二人は思わずハンカチで顔をあおいだ。

「お待たせしました」

扉が開いて現れたのは、日に焼けた肌に白髪交じりの、現地の人にも見える風体の男だった。経理担当の海原慎一だ。

「君が翔平君か。目的はわかっているよ」

少しカタコトな日本語が、この街での年月の長さを感じさせた。

「このファイルに、君の求めているものがある。ただ、一つ聞いておきたい」

「なんでしようか」

「この中には、君の父親の判子もある。それから、二十六年前にこれを表に出そうとした男がいた。君の父親と大塚の同期で、真壁という。彼はこの街で事故にあつて亡くなった。……言いたいことは、わかるね？」

「おい、翔平……これ、本当に持って帰るのか？」

岸辺の声は震えていた。

翔平は覚悟を決めて、口を開いた。

「父も含めて真実を明らかにして、間違いを正したいです」

「持っていけ。二十六年間、君のような人が来るのを待っていた」

二人はファイルを受け取った。

「例のコンサル会社の出資者を見てみる。森下という名前がある。大塚の奥さんの旧姓だ。俺は二人の結婚式に出てるからな」

そう言うと、海原はどこかに電話をかけた。

「お久しぶりです、海原です。芹沢さんの息子さんが、ファイルを持って帰るそうです。……はい。はい！　すぐに向かわせます」

電話を切った海原の顔色は変わっていた。

「元上司の常勤監査役だ。明日九時から、本社で緊急の経営会議がある。大塚はそこでLNGの最終承認を通すつもりだ。監査役が議題をねじ込んで、君たちを説明者として呼んでくれる。明日までに戻らなければ、すべて無駄になるぞ」

岸辺が時計を見た。

「最終便が二十三時、搭乗締め切りが二十二時。今が二十時だ。急がないと」
部屋を出る前に、翔平は姿勢を正し、海原の目を見た。

「海原さん、ありがとうございます。必ず真実を明らかにしてきます」

二十一時。空港へ向かうタクシーは、ジャカルタ名物の大渋滞に飲み込まれていた。
た。

「おい翔平、この調子じゃ間に合わないぞ！」

窓の外を眺めていると、プーッと一台のバイクが横に付いた。乗っていたのは、なんと海原だった。

「乗れ！ 定員一名だけだな！」

「お前が行け！ 俺は明日の便で帰る！」

岸辺が叫んだ。

「わかった！ 海原さん、恩に着ます！」

「しっかりつかまってるよ！ ジャカルタ歴二十三年の土地勘で、最速で連れて
いってやる！」

翔平を乗せたバイクは、車の列の間をすり抜けていった。

対峙

機内の灯りが落ちても、翔平はファイルを開けられなかった。二十六年前の損失の明細を一枚ずつめくっていくと、最後の一枚で手が止まった。

「帳簿の損失額より、四十億も少ない……」

本当の損失は、八十三億四千万円。その数字は窓の外が白むまで、何度も翔平の頭の中にこだました。

羽田に着いたのは朝の八時前だった。タクシーに飛び乗り、本社の会議室に駆け込んだのは九時ちょうどだった。

「監査役からの報告に入ります。説明者は、営業本部の芹沢翔平君です」

常勤監査役の声で、役員たちの視線が一斉に翔平へ向いた。大塚だけが、爪を眺

めたまま顔を上げない。

翔平はファイルを机に置いた。

「今回のLNG権益の取得費用には、説明のつかない百億円が含まれています。名目は『現地調査費用』、支払先はジャカルタのコンサル会社です」

役員たちが顔を見合わせる。翔平はファイルから一枚を抜き出した。

「同じ会社の名前は、二十六年前の伝票にも出てきます。当時の海外案件で出た損失は、本当は八十三億四千万円でした。ところが帳簿には、百二十三億四千万円と記録されています。差額の四十億円は、やはり『調査費用』としてこの会社に支払われていました。ですが、調査が行われた記録はどこにもありません」

翔平は二枚の書類を並べた。

「二十六年前は損失を水増しして、今回は取得費用を上乗せして、同じ会社へお金を流している。手口も行き先も、まったく同じです」

会議室がざわめく。翔平は続けた。

「さらに、出資者の欄にある森下という名前は、大塚副本部長の奥様の旧姓です」

初めて、大塚が顔を上げた。

「面白い話だねえ。でも、その資料はどうやって手に入れたのかな？」

大塚は一枚の紙を机に滑らせた。

「芹沢君、君は他人のIDで機密フォルダに侵入した。人事とはもう話がついていてね。来週付で、東峰マリンサービス八丈島出張所へ出向だ。いい所だよお、海がきれいで」

役員の何人かが息をのんだ。

しかし翔平は紙を見ずに、ファイルを開いたまま答えた。

「出向でも何でも受けます。ですが、この数字と過去は消えませんがしばらく沈黙が続いた。

それを破ったのは監査役だった。

「監査役として、本件の承認を社長の帰国まで差し止めるよう求めます。送金も一旦凍結してください」

異を唱える役員はいなかった。

百億円は、東峰商事の口座から一円も動かなかった。

役員たちが出ていった会議室で、大塚は一人、自分の指先を見つめていた。きれいに整えた爪が、一枚だけ割れていた。大塚は小さく舌打ちをすると、携帯を取り出した。

会議室を出た翔平は、そのまま監査役室へ向かった。明日帰国する社長に、すべてを報告するためだ。

同じころ、ジャカルタのホテルで、岸辺の携帯が鳴っていた。

「岸辺君、君の実家の工場、借金が大変なんだってねえ……。そこで一ついい話があるんだ。私が良くしてもらってる取引先の人からね、君の工場を買い取ってもいいっておっしゃってるんだ。その代わり、ひとつだけ、お願いがあるんだ……」

大塚の喋り方は、いつもどおり甘ったるかった。

「断つてもいいんだよ？ 真壁君みたいになりたいな・ら・ね」

その夜、昼の便で帰国した岸边は、残業していた翔平を廊下で呼び止めた。

「翔平、そのファイル、俺が預かるよ。お前、狙われてるだろ」

差し出された手は、少し震えていた。翔平が迷った一瞬の隙に、岸边はファイルを奪って走り去った。

翔平は追わなかった。

遠ざかる足音を聞きながら、翔平は自分のこめかみを指で軽く叩いた。

「八十三億、四千万……八十三億、四千万……」

誰もいない廊下で、込み上げる感情を何度も叩き伏せるように繰り返した。

正しい行い

翌朝、翔平は入館ゲートで引っかかった。「出向準備のため停止中」。大塚の仕業に違いはない。

「こっちだ」

地下駐車場の通用口で、監査役が手招きしていた。翔平は誰にも見られないまま、役員フロアへの階段を駆け上った。

役員室では、帰国したばかりの社長の前に、大塚と岸辺が立っていた。

「いやあ社長、大変でしたよ。芹沢の息子が、でたらめな数字で会議を引っかき回しましてねえ。原本は岸辺君が取り返してくれました。ご覧ください、八十三億なんて数字は、どこにもありません」

ファイルの最後の一枚には、帳簿どおりの百二十三億四千万円が記されていた。

岸辺は目を伏せたまま、うなずいた。

扉が開き、監査役と翔平が入ってきた。大塚の口元が、一瞬だけ引きつった。

「社長。昨日、芹沢君が報告に來た際に、原本の写しを取っておきました」

監査役が差し出した写しの最後の一枚には、八十三億四千万円とあった。

社長は二つのファイルを見比べ、翔平に目を向けた。

「数字が違うな。どちらが本物か、示せるか」

翔平は大塚のファイルから、最後の一枚を抜き出した。

「これは二十六年前の書類のほうです。ほかの紙はどれも黄ばんでいるのに、この一枚だけが真っ白です」

翔平は、写しの同じページをその隣に並べた。

「それに、もし僕が数字を捏造したのなら、自分の主張と食い違う紙を、わざわざ原本に入れる理由がありません。この一枚を差し替えて得をするのは、一人だけです」

社長は白い紙を光にかざし、長く息を吐いた。

「芹沢君、君の言うとおりだ」

「……見ました」

岸边が、震える声で口を開いた。

「副本部長が、その紙を差し替えるところを。実家の借金のことです脅されて……」

『真壁君みたいになりたいのか』とも言われました」

「真壁？」

社長が眉をひそめた。

「二十六年前に、ジャカルタで亡くなった彼か……」

「あ、あれは事故だ！ 私は何もしていない！」

大塚が声を荒らげた。社長は静かに言った。

「私は、亡くなったとしか言っていない。なぜ君は、自分が疑われると思ったんだ？」

役員室が静まり返った。大塚は、整えた爪で机の縁をつかんだまま動けなくなっ

ていた。

そのとき、扉がもう一度開いた。監査役から連絡を受けた太郎だった。

「その書類に判子を押したのは、私です」

＊

二十六年前の夜。病院の廊下には、消毒液のにおいが漂っていた。

出産を終えた翔平の母は、出血が止まらず集中治療室に運ばれていた。新生児室のガラスの向こうで、生まれたばかりの翔平が小さな拳を握っている。

もしものときは、男手一つでこの子を育てる。太郎は、ガラスに額をつけたまま、そう覚悟を決めた。

「おめでとう、芹沢君」

振り返ると、大塚が立っていた。

「真壁君のこと、聞いたかい？ 気の毒にねえ。ジャカルタの道は危ないから」

大塚は、一枚の書類と太郎の印鑑を差し出した。

「損失の処理を、先に回すだけの書類だよ。印鑑は、君の引き出しから借りてきた。君にはこれから、守るものがあるだろう？」

大塚の視線が、ガラスの向こうの翔平に移った。

太郎は、震える手で印鑑を受け取った。

＊

「四十億が抜かれていたことは、知りませんでした。それでも、判を押したのは私です。あれから、私は大塚に逆らえませんでした」

太郎は、そこで初めて翔平を見た。

「いつか誰かが止めてくれると思って、お前と岸边をこのプロジェクトに入れた。なのに、喫茶店であいつから電話が来たとき、怖くなった。だから、首を突っ込むなどと言った。それでもお前は踏み込んだ。オフィスでお前と会ったあの夜、副本部長室で言われたよ。代表を降りなければ、お前を懲戒解雇にするとな」

少し間をおいて、太郎は続けた。

「『正しい行いは必ず見られてる。悪い行いも、必ず見られてる』。お前は昔から、

前半しか覚えていなかったな。俺がずっと自分に言い聞かせていたのは、後ろ半分のほうだったんだ」

一週間後、八丈島への辞令は取り消された。翔平の胸には、本部の新しい社章が光っていた。

大塚は懲戒解雇となり、退職金も支給されなかった。特別背任未遂と文書変造の疑いで刑事告発され、真壁の死についても警察が改めて調べ始めた。それでも大塚は、取り調べで「私は会社のためにやった」と言い続けているらしい。

翔平はLNG案件の新しい代表に就いた。降格処分を受けた岸辺は、自ら翔平のチームを志願した。太郎は過去をすべて公表し、静かに会社を去った。

辞令が取り消された日の夜、監査役は誰もいない監査役室で、ジャカルタに電話をかけた。

「海原君か。終わったよ」

受話器の向こうで、しばらく何も聞こえなかった。やがて、鼻をすする音がした。

「……二十六年、長かったですね」

「ああ。真壁君の次は、君だと思った。だから原本を預けて、遠くへやった。長いこと向こうに置いたままにして、本当にすまなかった。来月、君を本社に戻す辞令が出る。帰ってきたら、二人で真壁の墓に行こう。報告することが山ほどある」

監査役は受話器を置くと、引き出しの奥から一枚の古い写真を取り出した。二十六年前、あの案件が始まったばかりのころに、ジャカルタの空港で撮ったものだ。若いころの自分と海原、太郎、真壁、そしてまだ爪を整えるようになる前の大塚が、肩を組んで笑っている。

いつもの喫茶店。いつもの席に、翔平と太郎が座っている。

太郎はコーヒーを一口飲んで、窓の外を見たまま言った。

「正しい行いは、必ず見られてる」

翔平は迷わずに返した。

「悪い行いも、必ず見られてる」

太郎は、少しだけ笑った。

父の言葉は、もう翔平の頭の中でこだましてはいなかった。

あとがき

本作は大学の課題で執筆した。

課題は「ウラジミル・プロップ『昔話の形態学』の三十一の機能を使って、物語を創作する」だ。プロップはロシアの昔話を研究、分析し、物語の本筋に直接影響を与える行為を「機能」と定義づけた。

本作をありきたりな展開の連続だと思った方は、お目が高い。まったくそのとおりなのだから。逆に、これを面白いと思ってくれた方がいるのであれば、なんとも嬉しい限りだ。ありきたりな展開であっても、設定や人物像の具体性という味付けで、面白い物語を作れたということだからだ。

ここからは自分語りなのだが、自分にはゼロから一を生み出す才能がまったく無いと思っていた。しかし、ある人からもらった言葉が印象に残っている。

「世の中、本当の意味でのゼロイチはそんなに多くない。大体のゼロイチは、既存のものやどこかで見たものを、無意識に組み合わせて作られている」

本作は、まさにそれを体現しているかのようだ。

広く浅くから、広く深くへ。二十一歳の目標だ。たくさんの創作や学問に触れて、引き出しを多くしていきたい。

二〇二六年十月 増田光

こだま

二〇二六年十月十七日 初版発行

著 者 増田 光

発行所 松本出版



9784899990017



1920193006803

定価：本体680円（税別）



作品サイトは
こちらから

松本文庫 ま 1-1

新鋭・増田光、待望のデビュー作。

東峰商事の若手社員・芹沢翔平は、営業本部長の父から「副本部長の案件には首を突っ込むな」と釘を刺される。だが社運を賭けたLNG権益の資金計画には、説明のつかない百億円が紛れ込んでいた。

翔平が調べ始めた翌朝、父は理由も語らずにプロジェクトの代表を降りる。同期の岸辺と金の流れを追ってたどり着いたのは、ジャカルタ支店と、二十六年前の伝票に残る一人の名前だった。

「正しい行いは必ず見られてる」。幼いころから聞かされてきた父の口癖には、翔平の知らない続きがあった。

